

お 香 の か お り

高 橋 庄 一

風薫る五月のある日、新発田市滝谷新田在住の山の犬先達、杉原八百樹先輩を、岳友本望英紀氏と共に訪ねた。玄関に入ると良いかおりが漂よってくる、抹香くさい線香のかおりでもない、何の匂いか判らないまま挨拶を済ませ、八百樹氏にまた山の講釈を伺いに来ました、お聞きしたいことが山程ありますので宜しくと、玄関から茶の間へ上って、かおりの話になった。

これの匂いだ、とお仏壇の前から長方形の箱を持ってこられた、香箱と言うそうである。縦約10センチ幅約12センチ奥行25センチの片手で持てる大きさで二段になっている、下の段は引き出して香が入れてある、上の段は灰が入れてあり、灰をならす黒柿製で文鎖の形をした灰均しも有り、下の引き出しには灰の上に香を盛る道具が入れてある。

香を盛る道具は書道の小筆の軸で作ったもので米の検査に使う「刺し」と同じ作りである。検査用の米を少量俵、凧、紙袋、樹脂袋等の容器から取り出す為の道具でシャクリ具合で使い勝手に大分差が出る。

大黒印の「刺し」は使いやすかった、現役のときは毎日100トン位の米と格闘していたので、香を盛る刺しに似た道具を見て現役時代が懐かしく思いだされた。

平らに黒柿の灰均しで灰をならし、この刺しで香をコの字形に平らな灰の上に盛る、平時は三本盛り、お盆、法事等の特別な日には5本の香を盛るとの事、5本の香を盛ったら香がとほり終わるのにどれ位の時間が掛かるかお聞きしたら同席された奥様が「タイムは計った事が無いので判らないが半日位は保つのではないか、今度タイムを計っておきます」との事であった。

香箱は東京在住の八百樹氏の弟さんの手作りで、材は樫、隅八ヶ所にはキッチンと隅金が当ててあり細工は大変良く出来ている、弟さんは差し物大工さんですか、とお聞きしたところ「ナンノ、ナンノ鉄道に勤め定年になって趣味で色々な物を作っている、この黒柿の灰ならしも、香を盛る刺しもみんな叔父さんの手作りだ、トッテモ器用な人でなんでも造る人なの」との奥様の返事であった。

問題は香である、何で作るか判らない、色はやや薄い緑色、粒の大きさはルーペで見ると10メッシュの篩を通った位の大きさ、匂いはあまりしない、舐めてみるとかすかに苦みが感じられる。

米屋の現役時代に篩いに大分苦勞をした、メッシュはイ

ンチに対する目数、目は寸に対する目数で表しているが飾いの場合、対角線の内寸法が重要で針金の太さに依って対角線の長さは変わってくる、針金の直径を100分の1ミリ変えることにより約3パーセント歩留まりが違ってくる、毎時5～6トン処理するロータリーシフターの網目選定に苦勞したことを思い出す、香の太さは標準的な10メッシュの篩いで飾った大きさである。これは何です、と奥様にお聞きしたところ、桂の葉で家で作るんですとの事で自家製の香であった。

お盆の13日前の晴天の日を選んで一日で香を作り上げるのだそうである。八百樹氏の裏庭には抱き回せない程の桂の大木がある、盆の十三日前に今日の天気は大丈夫と目処がつくと近所の男衆の応援を頼み朝飯前に桂に梯子を掛け桂の枝卸しをする、下で待ち受ける女衆が枝に付いている葉をすなごき取る、取った葉はすぐに日当たりの良い庭に広げた筵の上に広げ、一日で干し上げる為にはチョウシながら干さないと一日で仕上がらないとの奥様の談であった。

夕方、カラカラに干上がった桂の葉を臼に入れ杵で搗く、薬研は使わなかったですかと、聞くとかなりの量を作らなければならないので、薬研ではとても間に会わず、臼で兎の餅つきのように搗くとの事、雨が降ったり、曇りの日で一日で製品化出来ないと色も悪く、かおりも悪くなるとの事、観天望気が大事におなってくる、今はテレビの天気予報が観天望気よりも正確である。

臼で搗いた桂の葉の粉を篩いで篩って、篩いを通らないポツアアは捨て下に落ちたものを香として保存するとの事、年間必要量はどれ位ですか、と聞くと香箱で五つ六つとの事、量としては二升か三升であろうか。毎日、朝起きると仏前の鐘をガンと叩き、香を焚くのがおじいさんの仕事と八百樹夫人が話しておられた。

滝谷新田は全戸が曹洞宗で本山は永平寺とのこと、桂の葉で香を作る風習は滝谷新田だけで、隣部落には香を作る風習は無く、滝谷新田だけで他部落では作らないとのことである。

完全な自給自足の生活をする為、香までも自家生産したものであろうか、越の国の蒲原郡には桂の樹は無く、旧石山村に育った小生も初めて知った事で興味深かった。昔、鱒取倉山へ松脂を取りにいった、何に使う為に松脂を取りに行ったか聞いたところ昔、炭焼きが一時、二時の早

朝に炭焼き小屋に向かう際に明かりとして使ったものらしいが、灯火としてどのような方法で松脂を燃したか、知っている人は全部、死に絶え誰も方法が判らないとの事、昔のやり方を伝承し、記録することの大切さを思いしらされる。

現代人で火打ち石又ははずみ車を使って火を作れる人が何人いるだろうか、子供の頃、三吉のジジがキセルでタバコを吸う際に火打ち石で火をつけていたのを鮮明に思い出さず、金鏝の歯を加工しアールのついた部分で石にこすり火花を出す、乾燥した蒲の穂をほぐし焰哨をまぶした火口、キセルに刻み煙草を軽く詰め火口を煙草の上にほんの少しあげ、雁首に火打ち石を沿わせ打金でこする、火花が火口に燃え移り煙草を吸うことができる、火口が無ければ絶対に火は煙草に移らない、蒲の穂は手に入る、焰哨は線香花火の火薬で代用出来る、煙管は手持ちが有るか刻み煙草が手に入らない、パイプ煙草すら入手困難、我々老齢の年金生活者は時間と手間は充分すぎる程ある、刻み煙草を煙管に詰め火打ち石で火をつけ、ゆっくりと煙草を楽しみたいが、パイプ煙草でも良い、火打ち石で火をつけてゆっくりと煙草をくゆらす、火打ち石で煙草に着火は再現不可能ではない、巻き煙草をほぐしパイプに詰め、火打ち石で火を着ける、百円ライターより風情があると思うのだが？

昔の農家の生活はきびしく、基本的には自給自足、畑に綿を作って糸をとり機を織る、菜種を作り菜種油をポコポコで燃やして明かりとする、良い米は売り屑米が自家用、全部売り油臭いが安い南京米を自家用にする家もあったそうである、現金収入に乏しい蒲原の農家の生活はみじめなものであった。

蒲原平野には桂の樹はなく、香を作る風習はまったく無く、桂の葉で香を作ることは八百樹氏を今回訪れ初めて知った、滝谷新田も過疎化が進みこの習慣がいつまでも続くかと危惧される。

新潟市姥ヶ山地内に桂の樹が街路樹として列植されている、桂の葉を入手するのは困難ではない、新潟市の桂の樹から葉っぱを泥棒し、小生がお隠れあそばした際の香は、この香を使うよう遺言しておき小生の葬儀に本人手作りの香を使う。これぞ究極の自給自足、かなり大量の桂の葉が必要、所有者である新潟市から刑事事件として告発されることが危惧される、なにか良い知恵がないものかと、思い悩んでいる。

杉原八百樹先輩も七十八歳、小生も七十四歳、お互いに歳である、一回一回が、暇乞いと少々淋しい気持ちになり杉原邸を辞し、本望英紀氏の車上の人となり帰途についた。

カツラの利用など

「香剤とした植物」にカツラを取り上げ、呼び名と使用している県名は次のようである。

お香の木（岩手県）、香の木（宮城・新潟・長野県）、抹香の木（青森・秋田県）

カツラを民具：「はり板」の材料として北アルプスの山麓で使っている。また、新潟県糸魚川市大所、富山県朝日町山崎・立山町芦弁寺・山田村赤木、岐阜県丹生川村一重ヶ根・高根村日和田・朝日村背屋・高根村野麦・高根村中ノ宿などでもはり板として使用している。カツラはは（張）り板として最高であるという。「張り板は幅40センチ、長さ2メートル以上ある一枚板で、濡れた布を張って天日に干してもくずれず、きめ細かさでささくれ立たない材」であることによる。

秋山郷では、カツラの木部を水虫の民間薬に、アイヌの人たちはカツラ樹皮の煎じ汁で黒色の染めに使っているとも記録されている。

年中行事に見る田の神信仰でカツラが使われている。「田なんべい」という行事で、苗代に種蒔きが終わるとヤナギの枝を水口に三本か五本たてる。田の神様が腰をかける所だといっている。ヤナギの枝の代わりに、カツラを挿すこともある。また、カツラは鎮守の森の「ご神木」にしていることもある。

長澤 武：植物民俗 法政大学出版局（2001）より